

広島大学 大学教育研究センター 大学論集

第22集 (1992年度) 1993年3月発行：1-10

# 大学研究の20年

—大学はどこから来て、どこへ行くのか—

喜多村 和 之



# 大学研究の20年

—大学はどこから来て、どこへ行くのか—

喜多村 和 之\*

[はしがき]

広島大学・大学教育研究センターの20周年記念にあたって、『大学論集』編集部より、「高等教育研究の回顧と展望」を書くよう求められた。1972年から1990年まで専任教官として大学教育研究センターに在職していたという経歴から、このような機会を与えられたものと思う。私は、書くべきことはすでに旧稿〔『大学研究』の意味—大学教育研究センターの歩みを通して〕『大学論集』第19集（1989年度 P.1-22）にすべて執筆したことからお断りをしたのであるが、にもかかわらず編集担当者は再三にわたって執筆を要請された。そこで私は旧稿ではとくにくわしくは言及しなかった大学研究の原点について、若干のコメントを述べて、責めをふさがせていただくことにした。なお小稿では、大学教育研究センターの専任スタッフの活動もふくめて言及せざるをえなかったため、現在は専任教官の身分ではない自分をもその中にこめて、あえて「われわれ」という表現をとらせていただいた。また「高等教育研究」とせずに「大学研究」としたのは、センターの追究してきた課題の中心は、高等教育全般を客観的にかつ外側から研究の対象とするばかりでなく、大学の中において自らが大学を吟味するという意味での大学研究にある、と考えたためである。言うまでもないことだが、この文章はセンター専任者のひとりであった筆者の自己吟味であり、何よりも自己への問いかけとして書かれたものであって、センターの高等教育研究の評価は他者にゆだねるほかないのである。

## 1

プラトンの『ソクラテスの弁明』のなかで、ソクラテスは一匹の馬を都市国家アテネにたとえ、じぶんを小さな蛇にたとえている。あまりにも有名な箇所ではあるが、小論の出発点とするため、以下に引用させていただく。

「わたし [=ソクラテス] は何のことはない、すこし滑稽な言い方になるけれども、神によってこの国都 [=アテナイ] に、付着されているものなのです。それはちょうど、ここに一匹の馬があるとして、それは素性のよい、大きな馬なのですが、大きいためにかえって普通よりにおいところがあって、目をさまさしているのには、なにかあぶのようなものが必要だという、そういう場合に当たるのです。つまり神は、わたしをちょうどそのあぶのようなものとして、この国都に

\* 放送教育開発センター教授／広島大学 大学教育研究センター研究員

付着させたのではないかと、わたしには思われるのです。つまりわたしは、あなたがたを目覚めさせるのに、各人一人一人に、どこへでもついて行って、膝をまじえて、全日、説得したり、非難したりすることを、少しも止めないものなのです。だから、こういう人間をもう一人さがすといっても、諸君よ、そう容易に諸君には得られないでしょう。もし諸君に、わたしのいう意味がわかるならば、諸君はわたしを大切にしておかなければならないことになるでしょう。しかし諸君は、多分、眠りかけているところを起こされる人たちのように、腹を立てて、アニュトスの言に従い、わたしを叩いて、軽々に殺してしまうでしょう。そしてそれからの一生を、眠りつづけることになるでしょう。もしも神が、諸君のことを心配して、誰かもう一人別の者を、諸君のところへ、もう一度つかわされるのでないならばです。……」〔バーネット版, 30e-31a〕田中美知太郎訳, 筑摩書房版『プラトン』, 1965, p. 369]

古代ギリシャの古典から、長々と引用したのは、ほかでもない、ソクラテスのこの言葉のなかに、広島大学に大学教育研究センターが生まれた意味とその使命を示唆するものがふくまれていると考えるからである。

周知の通り、西洋哲学の祖といわれるソクラテスは、すべての学問の出発点は自己自身を吟味し、その吟味の過程を通して自己の無知の自覚に到達することからはじまると考えた。なぜなら、自己が無知であることを自覚しないならば知を求める営みである学問への愛 (= *philosophia*) はそもそも生ずる筈がないからである。そして無知の自覚に至らしめる手段は、ロゴス (言葉, 論理) のみちびくところにはどこまでも真理を追究していくという対話術 (*dialektikhe*) であった。対話とはいうまでもなく、反論を許さず権威を以て一方通行的に陳述される説教ないしドグマではなく、論理と言葉 (ロゴス) のみに根拠をおく相互の問答であり論争であった。

ソクラテスのたとえを利用させてもらうならば、大学とは素性はよいが動きのにぶい巨大な馬であり、大学教育研究センターは、眠りがちな巨大な馬の目をさまさせるため付着された蛇のような存在ということになる。というのは広島大学は少なくとも設立の趣旨としては大学の自己研究 (吟味) の拠点として、まず大学問題調査室を、そしてさらに発展的に大学教育研究センターを創設したからである。そのことは1969年に出された広島大学大学改革委員会の建議に「大学は、旧来、大学自体を分析し究明する態度を欠き、その社会的機能を客観的に見つめるだけの自己吟味をも怠ってきました」という文章があることから明かである。その点についてはすでに筆者は前述の旧稿において言及し、センター20周年の記念誌等でも他の関係者によってくりかえし明言されているところである。

旧稿の「大学研究の意味」のなかで、1990年に筆者は、広島大学において大学教育研究センターがおこなう大学研究の意味について、つぎのように書いた。小稿の意図を更に明確にするため、あえて長文を再録することを許していただきたい。

「大学研究を大学内部で行うということは、もちろん、大学を純粹に学術研究の対象として、客観的に記述し分析するという立場が一方に成立しうるが、同時に実践的な目的のために大学と

いう機関や制度や機能を分析し、問題や矛盾を指摘し、評価したり、改善・改革の方向や方策を提示したりするという立場も成立しうるであろう。前者を純学術的研究とすれば後者は実践的研究と称することもできよう。

大学の中で大学を研究の対象とするということは、われわれ大学関係者が大学のなかで大学以外の他の分野を研究の対象とすることは、基本的な違いが生ずると考えられる。それは大学に直接的な関わりをもつ者が、大学それ自身を分析の対象にする、ということであるから、いわば自己がみずからの所属している組織そのもの、すなわち自己自身の分析、或いは評価を試みるということに他ならない。つまりわれわれが大学のなかで大学を研究するということは、大学の「自己研究」を意味する。そして大学の自己研究は、その研究遂行の過程において、たんなる客観的な自己の記述や分析にとどまらず、なんらかの目的ないしは必要から自己を評価し、その評価にもとづいて自己の変革をせまらざるをえないという、実践的な行為にわれわれを導いていくことがある。というのは、客観的な自己分析は否応なしにわれわれ自身に大学が抱える矛盾や混乱や問題の所在を提示し、大学の構成員でありかつ大学の意思決定の責任を負うわれわれ大学関係者に、その問題の解決や改善の実践を要求することになるからである。それはあたかも人間の心身の健康を研究の対象とする医学が、その客観的な診断の結果、重大な疾患を発見した場合には、それを放置しておくのではなく、われわれの存在（生命）を守るためにたんなる病因の発見から治療へと発展せざるをえないのと同様である。少なくとも医学は、病気を発見し、その病源を突き止め、これを客観的に分析すればそれで一切が終わるのではなく、いかにしたらその疾患を治療しうるか、という、究極的に人間の健康を取り戻す実践的目的と結合している学問である。それゆえ大学関係者が大学を研究の対象とするということは、いわば自己診断・評価の対象とすることに他ならず、さらに自己の診断や評価はなんらかの形で自己の改善や改革という実践的な目的へとすすまざるをえないという側面があるということである。

要するに大学研究は、大学を学術研究の対象として客観的に分析したり総合したりするという純学術研究という面と、大学関係者が大学自体を特定の目的のために点検したり評価したりする実践的研究との二重性をもたざるをえない、ということである。」

もし以上のような考え方が認められるとすれば、1972年から1992年に至る大学教育研究センターの研究及び諸事業の20年間を総括するひとつのメルクマールは、センターが大学という巨大な馬にとって虻の役割を果たしえたか？という問いを避けて通ることができないであろう。

最近或る研究会で、日本の大学・高等教育研究が低調であることの理由のなかに、大学研究などが必要となるのは大学に問題（ないし疾患）があるからで、したがって世間も大学を問題とせず、大学でも大学を問題とするような意識がない方が大学の健全な姿ではないか、という議論があった。いわば大学研究は大学の病理を対象とするものであり、馬が病気に冒されたときのみ獣医のように活躍すればよい、というわけである。

これに対して大学研究が低調なのは大学も社会も大学問題に正当な関心をもたないからであり、少なくとも大学人は大学の生理を不断に研究の対象とすべきだという反論があった。大学内ではた

えず大学を自己吟味の対象とし、世間に対しては大学の社会的責任や存在価値を説明しつづけることなしには、大学の存続発展はありえない。大学が問題が起きたときだけ大学に関心をもつというのは、マスメディアや世論や政治の世界においてはともかく、学術や教育の世界でもそうであっては問題である。流行にかかわりなく、あらゆる問題を冷静に学術的吟味の対象としつづけることの許される社会制度こそ、学問の自由をもつ大学の比較のない存在意義のひとつであり、そのためには、大学は大学の病理とともに、たえず大学の生理をも研究の対象とすべきである。それにたえず大学の生理の研究と、治療の実践を蓄積することなしにいかにして大学の病患に治療効果を発揮しうるだろうか、という議論である。

センターはこのような意味で大学の自己吟味と変革の源泉—ソクラテス的にいえば巨大な大学という馬を眠らさずにおく役割を果たしつづけたと言えるであろうか。

## 2

ところで一般に教育学ないしは教育研究は、現実の教育問題の解決や改善向上の役に立たず、またすぐれた教師を養成することにも有効とはいえない、という批判がしばしば行われている。とりわけ、高等教育においては、研究の水準や社会的効用の問題以前に、そもそも高等教育研究そのものが不在ないしは貧困であり、学界においてもその存在を認められるに至っておらず、ましてや今日の大学が直面している現実の諸問題の解決には全く対応できていない、とも非難されることが多い。ここでわれわれは、こうした批判の適否を吟味することはあえてしまい。わざわざ証拠を示すまでもなく、高等教育研究の貧しさと社会的効用に対する疑問は、過去20年間、大学で高等教育研究に従事してきたわれわれに対して、くりかえし学内外から突きつけられてきた否定しがたい事実であったからである。

ただ、あえて反論を試みるとすれば、われわれに対する批判には研究の成果に対する無知ないし偏見が少なからず存在すること（われわれのPR不足も責任の一端であろうが）、われわれは大学研究が既成の学会に学問なるものの一領域として認められたり、学会向きの理論や方法のパターンに合致するような研究成果を出すことだけが重要だとは考えてこなかったこと、という事実だけを指摘しておこう。その証拠に大学教育研究センターは過去20年間の歩みのなかで、かつて高等教育学会のような専門学会の創設を考えることは全くなかったのである。

それでもわれわれは大学研究を学問の対象として学問的方法を通して探求したいと志したことはたしかである。ただ、いわゆる〇〇学会によって認められるような体裁や内容や方法をとらなければ学問ではない、という偏狭な考え方には同意できなかっただけである。さらにいえば、大学研究が学として成立しうるか否かということにも、関心をもたなかった。（その意味では、既成学会の市民権を認められなくても当然のことであろう。）

同時に大学研究が社会的効用性をもちうるかという問いがつねにわれわれに突きつけられてきた。

ここでわれわれは、学問（ないし研究・教育）が現実の諸問題の解決に役立つ（或いは社会的効用性をもつ）とはいかなることか、ということ改めて吟味してみる必要があるだろう。さらにそ

の問いは、学問ないしその機能のひとつである研究は、そもそも何のための営みであるのか、さらには、大学を学問の研究・教育の専門的組織ないし制度としてとらえた場合、大学は社会的効用を発揮することを目的とした組織ないし制度であるか、という問いまでを吟味する必要が出てこよう。

しかし、ここではこの余りに基本的にして人間の歴史とともにくりかえし論ぜられてきた、古くて新しい問題を、いまさら筆者がもちだすことは避けて、ただつぎの点だけを述べるにとどめたい。

広島大学の現実の問題解決に役立たないという批判に対しては、われわれも広島大学の問題解決に役立ちえないような研究は日本の大学の問題、ひいては普遍的な問題解決にも役立ちえないであろうと考えた。しかし、現実に役立つという社会的効用性がないと思われるからといって、学問研究はそれ自体価値をもたないわけではない。じじつ、文科系では大学で行われる研究なるものは社会的効用とは直接的には無縁のものも少なくない。したがって大学研究の独自の存在根拠は認められて然るべきだというのがわれわれの主張であった。とりわけ広島大学においては、その成立の経緯もあって、センターは大学に関する資料館や情報センターの役割をはたせばよいのであって、大学論だの高等教育論だのといった迂遠で抽象的な研究を求めているわけではない、とする批判が、一部からしばしば寄せられたからである。

われわれは、大学研究が真に大学にとって役立つためには、情報は知識に高められなければならないこと、知識とは論理と実証による吟味の過程を経て、つまり学問として（必ずしも“学会”に認められるものではなく）追究されることによってはじめて可能になる、と考えたのだった。さらに広島大学は県立大学ではなく、日本国民の税金で維持されているのであり、センターがひとつの国立大学だけの用に奉仕することは国民の許容するところではないと考えた。現実には大学内においては原則的に研究テーマの設定は自由であり、学部自治の原則は、たとえ「吹けば飛ぶような」（としばしば揶揄された）センターですら、公的には無干渉という形で認められてきた。それゆえ、われわれは、われわれが重要なし緊急な課題と判断したテーマについては、きわめて自由に追究することが可能であった。少なくとも研究のテーマの選定、追究の方法に関しては、われわれは充分に学問の自由と組織的自治を享受しえたのである。その点はセンターにとって幸せなことであった。

### 3

ひっきょう、大学教育研究センターの大学研究の評価は、つぎの問に対して、われわれがなにをなしえたか、ということに帰着するのではないかと考えられる。すなわちわれわれの大学研究は、「大学とはなにか」、「大学とはどこから来て、どこへ行くのか」という基本的な問に、われわれなりの回答を出しえたであろうか。さらには、「大学教育とはなにか」、「大学教育は何のために、何を目標として行われるのか」「現代社会において、大学の役割とはなにか」という素朴な問いに自分なりの答えを出すことができたであろうか。われわれがそのような問いに直接答えられなかったとしても、すくなくともこうした問いをたえず念頭において大学研究をすすめてきたであろうか。

大学がどこから来たのかが明らかにされなければ、大学が現在どこにあり、どこへ行こうとするかの方向を模索することができない。大学の歴史的研究は、いうまでもなく、大学がどのように成

立し、変革され、現状に至り、そして将来どうかわっていくかを究めるための学問であろう。大学の実証研究は収集データや資料をいかに精密にかつ〇〇モデルに即して巧妙に説明したり解析したりするかでなく、現代社会の中で現実に果たしている大学の機能や構造を力動的にえぐり出して、その病理と生理を明らかにすることであろう。大学教育の研究は、客観的な心理学的・社会的・教育学的分析もさることながら、究極的には学問をめぐって教師と学生の相互作用が高められることを目指すものでなければならないであろう。大学評価の研究は管理や勤務評定に利用されるためではなく、その大学の教育目的を達成するための組織や教育プログラムの改善や革新を刺激することを目的とするものでなければならないであろう。さらに国民の多くが切実に知ろうとしていて、しかもあいまいなままに混迷している課題は、現代社会における大学の役割とはなにか、という基本的な問いである。これらの基本的な問いは、すくなくとも大学教育研究センターという国民の支援によって支えられている国立大学の研究機関としては、あらゆる研究活動の基軸にすえて追究されなければならない課題である。そして、センターの創設や発展を助けてくれた無数の人びとや、日本の国民にとって、いま最も切実に求められているのは、こうした問いにわれわれなりの答を提案することであろう。何故なら、日本の大学問題の大部分は、大学とはなにかということの不明や混乱からこそ生じていると考えられるからである。

この小さな論稿で主張したかったのは、もしこのような問題意識が欠如していて、この問題にわれわれなりの解を提出しつづける勇気をもちえなかったとすれば、日本における20年の大学研究の集積は、柱を失った船のように、時代や嵐の流れに全く背を向けた《ものぐさ》な趣味か、そのときどきの流行や風潮にゆれ動きながら、大学の周辺と学界の評判に支配される無益で自己保身的な努力に終わりがねないということである。

われわれはひょっとしたら、馬の急所を避けて、周辺部を刺す蛇の役割で終始してしまったのかも知れない。学問の世界でたかだか20年で何が出来るかという考え方が一方、限りある生命しか許されていない人間は、未完成なままでもその都度自分なりの生の意味を、表現していく勇気が必要なのではないか。

再びプラトンにもどると、かれはその対話編『プロタゴラス』のなかで、著名なソフィストで人間に徳を教えることができるとするプロタゴラスに対して、ソクラテスに「徳は教えられるか」と問わせている。[拙稿「徳は教えられるか—ソフィストにおける徳育可能論の根拠について」『理想』No.354, 1962年11月 p.74-87]

もし教育学が法律や医療のように人間の教育を可能にする専門の学でありうるならば、なぜ素人である筈の親や市民が子供の教育について口を出したり、教師を批判したりするのだろうか。同様に、もし政治学がプロの政治家を育成することが可能ならば、なぜ一般市民が政治の専門職たる政治家に対して反対したり批判したりして、素人が選挙に参加するのだろうか。

ここで問われているのは、人間の教育、とりわけ「人間が美しくかつ善くなること」と「善き市民を育成する」ということが、人間の力ではたして可能か、ということである。現代風に言えば、教育学は人間形成を目的とした専門の学問として社会的効用性を持ち、政治学は人間の政治行動や参加を可能にする機能において、社会的有効性を主張できるか、という問いである。更に言えば、



大学は高等教育の専門機関として社会に対して、自己の存在根拠を示しうるか、という問である。

「……家庭教育の失敗，学校教育の失敗，社会教育の失敗は，すでにみられたように，たえず徳育への疑惑と絶望とを生んでいるのである。ギリシャの伝統道徳はかならずしも偏狭なものではなく，その精神もきわめて高尚ではあるが，しかし与えられたままの伝統的道徳を説教するだけのことで，いかに形式を工夫しても，徳育上の効果はついに一定の限度を越えることはできない。その限界をのり越えるためには，徳は伝統的なものを越えた彼方にまで探求されなければならない。真にすぐれた人とは何であるか。このことがそもそもの出発点にかえて問われ，根本的に探求されなければならない。徳はいかに教えられるべきかではなく，徳とは何であるかが問われなければならない。しかしこれは本当の教師ソクラテスの仕事であって，ただ巧みに与えられた道徳を説くことを工夫したソピステスの仕事ではなかった。徳の探求はソクラテスに死をもたらしたが，徳の説教はソピステスに称賛と金銭とをもたらした，しかし徳育の問題は，今も昔も十分に解決されてはいない。吾々の徳育といえども，ソピステスに至るまでのギリシャの徳育以上に出ていないことを忘れてはならない。吾々はソピステスの徳育を軽蔑することができないのである。」[田中美知太郎『ソフィスト』筑摩書房，1957年 p.105-106]

大学研究の原点は，「大学とはなにか」「大学教育とはなにか」を問つづけることである。この問いは，誰も，ただちに明らかにすることはできないであろうし，その解は時代とともにうつりかわるものである。しかし，「大学がどこから来て，どこへ行くのか」という問を基幹にすえることのない，一切の大学研究は，大学研究の名に値しないと言うべきではなかろうか。数量データを精密に分析操作し，〇〇モデルを巧みに説明することを以て「学問」と称し更には後追いで安全な現状分析や「歴史解釈」をもつぱらとすることによって「教育研究」と称する人間不在の学会の研究発表と同じように。

大学研究の20年の歴史を経て，われわれは再び大学の自己吟味という原点に帰る機会に迫られているのではあるまいか。

## The Self-Study of the University

— An Essay on the Twenty Year's Research on Higher Education —

Kazuyuki KITAMURA \*

The Research Institute for Higher Education was originally established in 1972 at Hiroshima University as the first national research center on higher education in Japan.

The original mission of the center was a self-study of the university itself—something like a horsefly (Socrates) attached by the gods to a great but slow-moving horse (Athens) according to Plato (The Apology of Socrates). In connection with this expression, the mission of the horsefly (Research Institute of Higher Education) is considered to keep the great horse (the University) awake by constantly biting it, even if the angry horse, who was disturbed from its comfortable sleep, might kill the horsefly. Therefore, one of the criteria of evaluating the achievements of the Research Institute for Higher Education should be to what extent the Institute has accomplished this mission. If our Institute's achievements during the twenty years cannot answer (or, at least try to answer) the following fundamental questions: "What is the University?" "From where did the University come, and to what direction is it going?", all of the efforts may have proved to be just in vein. Although an objective evaluation should be made by outside evaluators, the author believes that it is time for us to reask and examine this original mission to ourselves in historical perspective.

---

\* Professor, National Institute of Multimedia Education/Affiliated Researcher, R.I.H.E.,  
Hiroshima University